

## 《WE 認証者インタビュー》

### 設計から現場まで「鉄骨のプロ」を目指す

国内外からの観光客が急増する沖縄県は、大型ホテルや商業施設など、空前の建設ラッシュを迎えている。沖縄市に本社を置く仲本工業は、大型建築物から空港などの公共施設、橋梁にいたるまで、総合建設業として地域の中核を担う。同社の鉄骨製作における溶接管理技術者として、図面設計から現場管理まで幅広く活躍する島袋ひかるさん（29）に話を聞いた。

仲本工業株式会社 鉄構部

島袋 ひかる 氏



「鉄骨のすべてを理解したプロになりたい」と語る島袋さん。その「すべて」とは、鉄骨製作における設計図面から工場溶接、そして現場溶接の管理と、まさに文字どおりの意味を持つ。穏やかで控えめな口調から受ける印象のなかにも、揺るぎない信念が伺える。

島袋さんは那覇市の首里で育ち、県内の工業高校から琉球大学工学部へ進んだ。「将来は建築の道に進みたい」と一貫した思いがあった。母親が自動車板金の仕事をし、親戚が電力関係で働くなど、技術系の環境が幼い頃から身近にあった。

大学では、環境建設工学科建築コースで学び、コンクリート構造物の耐震補強を専門とした。鉄骨ブレースによる補強技術の研究を、所属する研究室と仲本工業が共同で行っていたことが入社のかっかけとなった。

同社は、1966年に米軍関係の工事を主体とする鉄工所として設立。その後、民間工事、公共工事へと業態を拡大し、現在は建築や土木、鋼構造物を柱とする総合建設業として、沖縄県の地域社会や経済を支える建築に関わっている。国土交通大臣認定 H グレード工場として、県内のモノレール工事に伴う再開発物件や、那覇空港新国際線ターミナル、橋梁部門では伊良部大橋の建設など数々の物件を手がけてきた。

## ●現場を率先して希望

島袋さんは採用面接のときから「私は現場に行きたい」との希望を伝えている。「声が小さくて、人前が苦手」と自覚しながらも、それを上回る熱意がそこにはあった。現在の仕事内容は、鉄骨工事や耐震工事における施工図の作図や、現場工事の溶接管理を中心に、工場内の溶接工程にも気を配る。石垣島をはじめ、遠隔地での橋梁工事にも関わり、年間3ヵ月程度は出張工事というスケジュールだが、「橋梁工事は物件ごとに違う。その時しかできない経験を数多くしたい」と自身の成長につながるとして積極的に捉えている。

2012年の入社から今までの間で、溶接管理技術者（WE）2級を2014年9月、1級を18年9月にそれぞれ取得した。

最初の頃は苦労もあった。「性格上、現場の職人に対して、強い口調で話すことができなかった」。島袋さんの上司である玉城俊弥鉄構部長は「女性で若いということからなのか、仮に私と同じ事を彼女が言ったとしても、なかなか客先が納得してくれないことがあった。かわいそうに思ったし、そこが一番悔しいところだった」と振り返る。同社にとって、現場も担当する女性の溶接管理技術者は、島袋さんがはじめてだった。

ただその一方で「彼女の事を知る現場の職人は、逆に私の事より彼女の言うことをよく聞いてくれる」とも語る。なぜかと言うと「現場で彼女は誰よりも良く動く。ほんとうに感心するほど。男の管理者のように上から押さえつけるのではなく、下から押し上げていくタイプ」とその仕事ぶりを評価する。

島袋さんは溶接管理の仕事に対して、「WE1級を取得したとは言っても、実務の上での経験はまだまだ。先輩にフォローをしてもらうことも多い。さらに現場で経験を重ねていきたい」と謙虚に語る。



工場内の溶接ロボットと

## ●資格取得に向け勉強会

現在同社にはWE2級が16人、同1級が島袋さんを含めて3人在籍している。島袋さんは同じく受験をする社内の同僚と勉強会を企画した。「趣味は勉強」と公言するほど、机で学ぶこと

を苦しめない性分。学生時代から様々な資格を取得してきた。現在保有する業務に関する資格だけでも、1級建築施工管理技士、1級土木施工管理技士、建築積算士、1級鉄骨製作管理技術者など様々。

会社のバックアップも受けながら行った週に1回の勉強会では過去問を教え合い、模擬試験も行った。「やるからには皆で受かりたい」。ただ中には当然、試験勉強が苦手だという同僚もいる。

そこで島袋さんは自らの朝の自習後に、ホワイトボードに問題をいくつか書き残すようにした。ちょっとした隙間の時間に、皆で解いてもらおうとの試みだった。「問題のこの部分はどう思う？」と話しかけ、皆で考え合うきっかけを作った。「これから入社してくる若い人たちにも、溶接の奥深さや難しさを伝えられたらと思う。結果として工場や現場の溶接品質が上がってくればいいな」と語る。

### ●知識の裏付けが役立つ

WEを取得したことのメリットを、島袋さんは「現場溶接が多い時は、職人が溶接したところの検査をする。資格取得前は、例えば溶接部のアンダーカットが悪いということが言葉では分かっていたけど、勉強を通じて得た知識から、『理論上こういう理由だから良くない』と納得してもらえるような説明ができるようになった」と挙げる。

「かつては検査をしても元請や客先が、自分の言葉を受け入れてくれないこともあった。最近では1級資格を取ったことが認められるようになった」と感じるが増えた。

「相手から『この検査にはこういう意味があったんだ』と聞かれたり、検査の仕方を教えてほしい」と求められることが多くなった。「頼って聞いてくれることが嬉しい」と感じる。また今までは工場内で自社の職人が行った溶接部を見ても、ただ単に「綺麗だな」で終わっていたところが、「ここは盛りすぎ。欠陥がやすいな」と、議論ができるようになった。

玉城部長は会社としてWE取得の利点を「単に会社の存続としては取得者が1人いれば良い。ただし勉強の過程で知識を身に付けることと、資格を取ったという自信が大きく社員を成長させる」と挙げる。今後も会社としてフォローを続ける方針だ。



「経験と共に自信がついてきたようだ」と玉城鉄構部長（右）

## ●溶接の仕事にやりがい

島袋さんが溶接管理の仕事でやりがいを感じるのは「自社の工場で作った鉄骨が、現場でうまくおさまった時や、受け入れ検査で『溶接がきれいだよね』と言われた時」。いまでも溶接ビードに見とれてしまうことがあるという。さすがに管理者として自らが溶接トーチを握ることはないが、「機会があれば溶接もしてみたい」とひそかな希望を持っている。

鉄骨の工場製作図面を書くことが、入社当初の本来の業務だったが、「現場管理の仕事も続けたい」と思っている。今は CAD に数値を入力すれば、おおよその図面ができあがるが、「溶接士の溶接姿勢まで考えて図面を作っているか？」と度々に上司に指摘されてきたという。

「パソコン上ではうまくいっても、実際の現場で鉄骨が嵌らないということがある。現場の溶接を見ることで、細かいところにまで考えが及ぶようになると思う。その経験が次の溶接設計にも生きてくる」と語る。

将来の目標を聞くと「鉄骨のプロになりたい。図面を描きながら、溶接部のおさまりが完璧にイメージできて、的確な指示を工場にできる。現場溶接でも、不具合が出る前に加工指示ができるような存在」とイメージする。

休日の過ごし方は「県内のコーヒーショップ巡りや、クルマのオーディオいじり。自分で豆を挽いたり、機械をさわったりするのが好き」といった答えの一方、「1級建築士に向けた勉強をしている。勉強も趣味の一つ」と笑う。「やるからにはすべて一番上の資格を目指したい」。となると WE の特別級となるが、「面接試験があるのが・・・(笑)」と尻込みをするものの、特別級取得を目指す日も、やがて来るに違いない。